



TITLE:

<大會抄録>宋代の書鋪戸

AUTHOR(S):

草野, 靖

CITATION:

草野, 靖. <大會抄録>宋代の書鋪戸. 東洋史研究 1973, 32(3): 405-406

ISSUE DATE:

1973-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153517>

RIGHT:

大會抄錄

唐代の制誥と壁記

礪波護

今春、「唐代使院の僚佐と辟召制」と題する小論を發表し、節度使・觀察使の使院における僚佐の構成と辟召制の實際を、主として唐人の石刻文に依據して検討を加えたが、今回は、唐代の文人の手になる制誥と壁記を手がかりとして、唐代後期における官僚機構の變貌、とくに地方官の實態を考察したい。

個々の官吏の人事異動の際に、中書舍人ないし知制誥によって作成された辭令書は中書制誥とよばれ、文苑英華のうち四十卷分を占める。翰林學士による翰林制誥は同じく五十三卷を占める。しかし、唐文粹には全く收録されていない。制誥は、白居易・元稹らの文集において重要な部分を占めるが、四六駢儷體で書かれるのが一般的であったので、唐文粹では省かれたのであろう。壁記とは、官廳の壁に、その官廳・官職に關してかかれた文章である。英華には十三卷が收められる。

大唐六典をはじめ、正史や政書の類にあらわれた詔敕や制度が官職についての一般通則を示し、新しい官職に就かんと出發する友人に與えた餞送の序や書が餘りにもプライベートな性格をもつのに對し、特定の個人や官職を對象とした制誥と廳壁記は、その中間の性

格を有し、もっとも客觀的かつ具體的な史料を提供してくれる。本日はその一例として、國家の側からみた使院における辟召制の意味づけを制誥によって跡づけ、縣における縣尉の位置を縣尉廳壁記を通して考えてみたい。

宋代の書鋪戸

草野靖

書鋪戸は、正しくは寫狀鈔書鋪戸（狀鈔諸般文字を書寫する鋪戸）と呼ばれ、政府諸機關に投陳される諸種の私署文書に就いて、その投納の手續きを執り、また文書の代寫を行ない、時に記載内容の保任に當り、謝禮を得て生計を立てていた民間の業者である。宋代の文獻に據って確認されるところでは、この書鋪戸は、州縣司等に對する訴狀の代書投陳、州縣獄司の禁歷の登記・不動産質買・家産分割等の文書の作成申告、首都登聞鼓院に對する詞狀の投納書寫、禮部貢院及び國學宗學に對する受験書類の投納、吏部四選に對する參選文書の投納、左藏庫綱運錢物の交納及び文武官員諸軍諸司兵吏俸給の請支に要する文書の投納書寫に當っており、また北宋後期にはこれら書鋪の開業は政府機關の公認を得て行なわれていて、多くの政府機關に専屬の書鋪戸がいたことが考えられる。

本日はこうした書鋪戸の機能を考察し、尋いで、北宋の首都開封府の權貨務に屬し沿邊三路より將來された入中交引（交鈔）を保任して代價請求の手續きを執り、且つこの業務に據って大規模な交引

の賣買を行ない、國家財政にすくなからぬ影響を及ぼしていたと見られる取引鋪戸が、實は書鋪戸にはかならぬことを明らかにするつもりである。

トルコ語佛教寫本のクロノロジー

小田 壽典

トルコ語佛教寫本、とりわけ翻譯文學（佛典）の寫本斷簡は、トルキスタンの文化史的動向を理解する重要な史料である。しかし書寫の時期、さらに翻譯の時代について確かなものは少なく、トルコ族の佛教受容史の研究に十分役割を果たしていないでいる。一般的には、九世紀中葉北アジア回鶻帝國の崩壊後移住したウイグル系トルコ族の定着によって、天山南部の中央アジアは、初めてトルコ人の住地となった、という史實に基づいて、トルコ語佛典の成立時期もまた、西ウイグル王國（九世紀～十三世紀）に歸せられる傾向にある。従來通説としてその中に含まれる金光明經および慈恩傳のトルコ語譯者は、むしろ八世紀頃の人物ではないか、またチベット語から譯された「聖王訓誡と名付ける大乘經」・「文殊師利成就法」は、元朝下の作品にちがいないと考えられる。このことは、例えば名稱について、「ウイグル人自身その言葉を普通にはチュルク語と呼ぶ」という理解の、再考を促す。理論上は、「ウイグル (Uyghur) 人が經典を翻譯する場合に、自分の用いる語をチュルク (Türk) 語と稱すべき理由はない」のである。このような立場から、中央アジア

におけるトルコ族の文化受容を考えてみたい。

南インドの村落について

辛 島 昇

チョーラ王朝期の南インドの村落、とくにその土地保有について考察する。チョーラ朝とは、九世紀から十三世紀にかけて、東南海岸平野を中心に半島部を統治した王朝であるが、當時は數多くの石造寺院が建立され、その壁面に刻まれて今日に残る土地寄進刻文によって、その時代の村落内部の土地保有について知ることが出来る。

私はかつて、王朝初期（十世紀）のティルチラパッリ地區の刻文を検討し、當時の一般村落（バラモンに施與されたブラフマデーヤのような特殊村落でない）においては、ウールと呼ばれる土地保有者（耕作農民の共同組織）によって、村内の耕作地が共有されているのが一般的ではないかという推定を下した。

今、王朝末期（十三世紀）の同地區の刻文を検討してみると、一般村落内部の土地は、村内あるいは他村の有力者（*varan*）によって、個別的に保有されるようになってきていて、土地の賣買もかなり頻繁に行なわれていることが判る。しかし、ウールの共有地が全く消滅したわけでもなく、また、數人の個人が一村を幾つかのシェアに分けて保有するような形もみられ、この報告では、それらについて刻文の記載を今少し詳しく見てみたい。